

2 地域素材に配慮した授業展開例

教科(科目)	日本史 A	単元名	(1) 歴史と生活 オ 「地域社会の変化」
本時主題	本巣郡における富有柿栽培の発展に関する歴史的背景を探求する		2 時間分 / 2 時間
本時の目標	身近な果物である富有柿について関心をもち、その栽培の開始に関する歴史的背景を考察する。 【関心・意欲・態度】【思考・判断】 地図や統計資料を有効に活用し、富有柿栽培の開始について仮説を立てる。【技能・表現】 昭和初期の社会状況について理解する。【知識・理解】		
指導のねらい	学 習 活 動	指導上の留意点・観点別評価	
・ 明治時代と現在では本巣郡における土地利用が異なることを、作業的学習を通じて知る。 30分	「本巣郡の地図(明治22年/平成6年)」の着色作業。 水田、桑畑、果樹園について、それぞれ着色する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> Question 1 何が変化したのか？ </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> Question 2 果樹園で栽培されている作物は何か？ </div>	地図記号(桑畑、果樹園)について触れる。 地図をもとに、わかりやすい資料を作成する。【技】 評価方法 プリント提出、行動観察 身近な事例に関心をもち。【関】 評価方法 発問・挙手・発表	
・ 本時のメインテーマの提示。 ・ 問題の解決。 35分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> なぜ、本巣郡では桑から柿への転作が行われたのか？ </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> Question 3 桑は、何に利用されていたのか？ </div> 明治時代の養蚕、製糸業について概説し、アメリカ向けの輸出を中心に、当時の主要産業であったことを確認。	日常生活の中の事例に、歴史的な背景があることに着目する。【思】 評価方法 発問・挙手・発表 副教材の『図説』を利用して概説する。 養蚕・製糸については、野麦峠などの学習をとおりて中学校段階で十分学習している。	
・ 資料を活用してグラフを作成する。 75分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> Question 4 いつ頃から柿への転作が始まったのか？ </div> 資料「本巣郡の農業(明治45年～昭和13年)」を元にグラフを作成し、発表する。 桑畑面積は棒グラフ(左目盛り) 繭と柿の生産価額は折れ線グラフ(右目盛り)	資料を有効に活用して、効果的なグラフを作成する。【技】 評価方法 プリント提出、行動観察	
・ 製糸業の衰退(=桑畑の減少)の原因を歴史的に考察する。 ・ 副教材の『図説』巻末年表などから仮説を立てる。 85分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> Question 5 なぜ、転作が始まったのか？ </div> 「昭和5(1930年)」、「生糸のアメリカ向け輸出」などのキーワードをヒントに、製糸業の衰退を類推する。 いわゆる「昭和恐慌」について概説する。 柿栽培の先駆者である「松尾松太郎」について紹介する。	日常生活の中の事例に、歴史的な背景があることに着目する。【思】 評価方法 発問・挙手・発表 副教材の『図説』を利用して概説。 郷土の先駆者に興味・関心をもち。	
・ 柿栽培の発展(=果樹園の増加)の背景として、消費者としての都市市民の形成に触れる。 95分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> Question 6 柿を買ったのは、どのような人々か？ </div> 資料「六大都市における富有柿の主産地別総販売量(昭和11年度)」をもとに考える。 大正時代から昭和初期の都市化について概説する。岐阜市の繁華街の形成についても触れる。	身近な郷土の発展に関心をもち。 【関】 評価方法 近代史の考查問題とする	
・ 本時の直接のテーマではないが、近代史学習への動機付けとして扱う。 100分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> Question 7 不況から脱出するために、どんな施策が行われたか？ </div> 岐阜県における公共事業(岐垣国道や橋梁建設)について概説する。 満州移民についても触れる。	生徒の通学路に該当する橋があれば生徒に確認する。	

【参考文献】

- ・『社会科授業構成の理論と方法』 森分孝治 明治図書 1978
- ・『地図で見る岐阜の変遷』 (財)日本地図センター 1995
- ・『岐阜県史 通史編 近代中』 岐阜県 1970
- ・『岐阜県統計』 岐阜県図書館マイクロフィルム
- ・『糸貫町史』 糸貫町 1982
- ・『糸貫町と柿の歴史探訪』 棚橋武治 糸貫町富有柿センター 1998
- ・『ふるさと糸貫の歴史』 糸貫町 1977
- ・『岐阜県道路史』 岐阜県土木部 1992
- ・『わかりやすい岐阜県史』 岐阜県法令政策課 2002

【資料編】

1 「本巣郡の地図(明治22年/平成6年)」

『地図で見る岐阜の変遷』((財)日本地図センター 1995) より、本巣郡の部分を拡大コピーして使用。本稿には掲載不能なので省略。入手先は、岐阜県地図センター(岐阜県立図書館内)

2 「本巣郡の農業(明治45年~昭和13年)」

西暦(和年号)	桑畑面積(反)	繭の生産価額(円)	柿の生産価額(円)
1912(明治45)	623.4	396,312	7,401
1916(大正5)	690.0	785,663	9,597
1921(大正10)	803.6	975,850	74,617
1926(大正15)	833.2	1,783,161	131,674
1927(昭和2)	824.5	1,325,587	118,950
1928(昭和3)	878.3	1,142,575	153,185
1930(昭和5)	920.5	699,350	128,934
1931(昭和6)	920.5	585,414	199,263
1933(昭和8)	821.1	9,31429	164,029
1934(昭和9)	788.8	367,006	192,125
1935(昭和10)	716.6	683,184	220,330
1936(昭和11)	678.7	636,190	239,755
1938(昭和13)	632.1	545,580	323,863

『岐阜県統計』マイクロフィルムより作成。1929(昭和4)・1932(昭和7)・1937(昭和12)は、欠損。

3 「六大都市における富有柿の主産地別総販売量(昭和11年度)」 単位は「貫」

主要産地	総販売量	東京	横浜	京都	大阪	神戸	名古屋
岐阜	406,102	142,000	19,000	46,000	18,000	14,000	165,000
和歌山	278,387	15,000	-	21,000	201,000	39,000	-
愛知	83,550	24,000	-	-	-	-	58,000
奈良	71,571	-	-	23,000	32,000	15,000	-
岡山	52,920	1,000	-	-	11,000	39,000	-
京都	43,165	-	-	27,000	15,000	-	-
香川	34,251	-	-	-	32,000	-	-

『糸貫町と柿の歴史探訪』(棚橋武治 糸貫町富有柿センター 1998) より転載。原資料は「帝国農会青果物市況調査」。

【指導案の注釈】

- 『地図で見る岐阜の変遷』に所収されている25,000分の1の地図を用いて着色作業を行う。土地利用に関して、明治22年の桑畑や水田と、平成6年の果樹園とが見事に対比できる。
- 「地理」を履修していないため、桑畑や果樹園の地図記号について説明する必要がある。

- 果樹園で栽培されている果物については、該当地域から通学してきている生徒に答えさせる。統計資料としては、東海農政局岐阜統計情報事務所から毎年刊行される、「岐阜県の野菜と果実」に詳しい。岐阜県全体では、果実の総出荷量27,700トンのうち、柿が18,400トンを占める。平成11年度における市町村別の出荷量は、右表のとおり。

順位	市町村名	出荷量(トン)
1	糸貫町	4,950
2	岐阜市	3,500
3	揖斐大野町	3,470
4	真正町	1,910
5	巢南町	1,880

- 桑が蚕のエサであることが、発問から出にくかった。副教材の「図説」を用いたり、自分自身の小学校時代の経験(教室で蚕を育てていた)を話した。
- グラフ化すると、昭和5年に養蚕が大打撃を受け、その後も低迷したことが明白にわかる(昭和4年の「岐阜県統計」が欠損しているのが残念)。一方、柿は昭和初期頃から順調に売り上げを伸ばし、昭和恐慌の数年後(おそらく栽培開始から収穫までのタイムラグと推測できる)には倍増したことが読みとれる。

本時の資料作りのために、岐阜県図書館所蔵のマイクロフィルムから大正から昭和初期の郡市ごとの農作物の生産価額を拾い出す作業を行なった。昭和5年の繭価額の暴落と、それと入れ替わるかのように柿価額が増大していく様子が明白にデータとして現れたときは、我ながら面白かった。できれば、この感激を生徒自身に味あわせたいと思った。今回の学習指導要領の改訂の趣旨の一つに、「生涯学習」「学び方や調べ方の学習」がある。これを踏まえるとき、生徒に何をどこまでどのように調べさせるかということが問題になってくる。『学習指導要領解説』においては博物館や図書館の利用、情報通信機器の活用などがうたわれているが、具体的な授業をイメージした場合、なかなか良い智恵が浮かばないというのが正直なところではないだろうか。本時「富有柿」の授業も、生徒に何かを調べさせるのではなく、教師が調べた結果を生徒に提示して考察(探求)させるという従前の授業形態である。今後、「生徒に調べさせて発表させる授業」についての具体的な研究が必要になってくると思う。

- 富有柿の先駆者「松尾松太郎」については、『糸貫町史』に詳しい。松尾松太郎は1912(明治45)年に水田をつぶして柿苗30本を植えたのを皮切りに柿畑を拡張し、1917(大正6)年には1万個の柿を収穫し、300円の収入を得(当時の席田村=現在の糸貫町の平均的な米価は1俵7円。米の反収は5俵から5俵半。小作料が3俵から3俵半)。この結果を受けて松太郎は近隣の農家にも柿栽培を勧め、産地を形成した。
- 大正時代から昭和初期の産業の発達は、都市人口の増加や文化の大衆化を促進した。こうした大都市の市民層が柿の消費者であったことが資料からも読みとれるとともに、岐阜県は柿の販路を全国展開していたことがわかる。あわせて、身近な都市として岐阜市における繁華街の形成について触れる。『わかりやすい岐阜県史』によると、柳ヶ瀬商店街のアーケード完成が1928(昭和3)年、「丸物」の出店が1930(昭和5)年である。また、文化の大衆化という面からは、下呂温泉の本格的な開業が1931(昭和6)年、木曾川のライン下りの開始が1928(昭和3)年など、生徒の興味・関心を引きそうなネタが多く記載されている。

- 昭和恐慌への対策として、政府は1932(昭和7)年から「時局匡救事業」と称する公共土木事業を大々的に実施した(ただし、アメリカのニューディール政策のような大きな成果を上げる前に、日中戦争開始による軍事費増大にともなって、すぐに縮小する)。岐阜県下においても、岐垣国道(旧国道21号線、現在の県道 岐阜大垣線)の建設をはじめ、県道整備や橋梁の新設工事が積極的に遂行された。この時期に新設された橋を抜粋したものが右の表である。これらの橋の多くは共通の設計図に基づいた鉄筋コンクリート製の橋で、幅員が5.5メートルと狭かったため、現在では大半が架け替えられているが、生徒の通学路に当たっている物も中にはあり、興味・関心を引くことができた。

	橋の名称	架橋場所
時局匡救事業	長良大橋	岐垣国道
	墨俣橋	岐垣国道
	揖斐大橋	大垣 - 安八
	海老橋	北方真正 - 大野
	多芸橋	養老 - 赤坂
	繰舟橋	黒野 - 岐阜
	土岐橋	瑞浪停車場線
	中央橋	土岐市停車場線
一般会計予算	保土島橋	溝口 - 下白金
	藪川橋	国道303号
	海津橋	南濃 - 海津
	藍川橋	太郎丸 - 芥見
	鮎之瀬橋	関市小瀬
	南濃大橋	羽島大須 - 平田
	今尾橋	養老 - 平田
	平野庄橋	大野 - 神戸
	木曾川橋	羽島 - 稲沢

昭和7～9年に着工した主要な橋
(『岐阜県道路史』より作成)